

ホワイトペーパー：

予算と ROI から逆算するレガシー刷新

～ AI による「手戻りゼロ」の設計が実現する、次世代 ROI ロードマップ ～

発行日：2026 年 3 月 発行元：シーオス株式会社

エグゼクティブ・サマリー

「システム刷新には 3 年と数億円がかかり、投資回収 (ROI) が始まるのはその先です」一。

従来の SIer から提示されるこの常識は、ビジネス環境が激変する現代において、経営上の許容範囲を超えたリスクとなっています。さらに、「設計書を直すより、とりあえず作って直す方が早い」という旧来の開発手法は、膨大な手戻りと予算オーバーの温床でした。

しかし、AI の進化により「設計書から瞬時にプロトタイプを生成する」ことが可能になり、この常識は完全に逆転しました。本稿では、AI を活用した「手戻りゼロの完璧な設計」から入り、巨額の予算リスクを平準化し、現場と共にシステムを進化させていく「次世代 ROI ロードマップ」の描き方を解説します。次期システム投資の稟議を通すための根拠資料としてご活用ください。

第 1 章：なぜレガシー刷新は「予算オーバー」と「回収遅れ」に陥るのか

「とりあえず作る」アプローチの限界

従来のシステム開発では、「完璧な設計書を作るのは時間がかかるから、まずはプロトタイプ的にコードを書いて、画面を見ながら直していこう」という考え方が主流でした。「設計書を直すよりコードを直す方が早い」という常識です。

膨張する「手戻りコスト」の正体

しかし、サプライチェーンのような複雑なドメインにおいて、このアプローチは致命的です。現場の細かな例外や、部門間のデータの粒度を設計段階で詰め切らないまま作り始めると、テスト段階で「やっぱりこの条件では現場が回らない」という根本的な手戻りが頻発します。結果として開発期間は延び、追加予算が請求され、ROI の達成は夢物語となります。

第 2 章：AI によるパラダイムシフト「手戻りゼロの超高速設計」

「完璧な設計」から入るのが最短ルートに

AI の進化は、この開発プロセスを根本から覆しました。現在では、人間が記述した「設計書（要件

定義)」をAIに読み込ませることで、瞬時に「動くプロトタイプ」を生成することが可能です。

これにより、「とりあえずコードを書く」必要はなくなりました。AIが生成したプロトタイプを現場に見せ(第4回参照)、UIや業務フローのズレを「設計段階」で徹底的に潰すことができます。

「コードを直すより、設計書を直してAIに再生成させる方が圧倒的に早い」という逆転現象が起きたのです。この「手戻りゼロ」のアプローチにより、開発にかかる無駄な時間とコストを極限まで削ぎ落とすことが可能になります。

第3章：ビジネスを進化させる「段階的アプローチ」の真価

数年規模の全面刷新という思い込みを捨てます。手戻りゼロの設計力を活かし、最重要機能(コア)や、最も出血が大きい継ぎ目から段階的にリリースしていくアプローチには、早期のROI獲得以外にも「3つの巨大なメリット」が存在します。

①運用しながら要件を固め、共に進化する基盤

ビジネス環境が激変する中、3年後の要件を今すべて予測することは不可能です。段階的アプローチであれば、フェーズ1で作った機能を使って実際の業務を回しながら、「本当に必要な次期機能は何か」というビジネス要件を解像度高く固めていくことができます。最初から過度に仕様を固定化させず、将来のビジネス環境の変化に合わせて、必要な機能をブロックのように自由に足し引きできる「余白(変化への対応力)」を持たせた設計を行います。これにより、導入直後から古くなるシステムではなく、時代に合わせて進化する基盤となります。

②現場の教育コストの劇的な削減

重厚長大なシステムを一気に導入すると、現場は全く新しい画面と操作手順の洪水にパニックを起こし、膨大な教育期間とマニュアル作成コストが発生します。段階的なリリースであれば、現場は少しずつ新しいシステムに慣れていくことができます。結果として現場の拒絶反応を最小限に抑え、教育コストと定着までのタイムラグを劇的に下げることが可能です。

③フェーズごとの自己資金化(キャッシュ創出)

例えばフェーズ1(半年~1年)で「受注と配車の連携」を実現し、そこで浮いた数千万円の物流コスト(キャッシュ)を、次のフェーズ(倉庫システムの高度化)の原資に回します。利益を回収しながらシステムを拡張していく、無駄のないエコシステムが完成します。

第4章：経営会議における「稟議決裁の新たな根拠」

「予算の平準化」がもたらす決裁リスクの極小化

経営層の意思決定において、「一撃で数億円の投資を承認する」ことは極めてリスクが高く、決裁スピードを鈍らせる最大の要因です。

段階的アプローチは、開発ごとの予算がならされる（平準化される）という経営上の絶大なメリットをもたらします。「フェーズ1の数千万円で、半年後にこれだけのROIが出る。まずはここを決裁し、その結果を見てフェーズ2の判断をする」という形に投資リスクを分割できるため、経営層は圧倒的に意思決定がしやすくなります。

パートナー選定の最終基準

このロードマップを実現できるのは、「要件の再定義」「複数ドメインの統合」「高度な設計力」「現場の納得感」のすべてを束ねる「統合推進力」を持ったパートナーのみです。システム製品の都合に縛られない中立的な立場で、経営の視点から予算を平準化し、ROIをコミットできる伴走者を選ぶこと。これが変革を確実にする唯一の選択肢です。

まとめ：10年先も戦える、持続可能なロジスティクス基盤へ

基幹業務システムの刷新は、単なるITインフラの更新ではなく、ロジスティクスを競争力の源泉へと転換するための経営レベルの重要なプロジェクトです。AIという強力な武器と、手戻りゼロの設計アプローチを手に入れた今、段階的かつ現実的な変革を実行していくこと。的確な経営判断と実行プロセスこそが、長期的な競争優位性を確立するための確実なアプローチとなります。

後発でのシステム刷新を迎える企業にこそ、業界のDXリーダーへ一気に躍進するチャンスが訪れています。